

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成20年8月5日発行(毎月5日1回発行)  
第48巻8月号(通巻589号)

# 風土



魁夷の馬

神蔵

器

青鷺の吹かるる山梨文学館

魁夷の馬夏至の群青世界かな

神田川梅雨の満月さかのぼる

まつさらな刻朝顔の種を蒔く

兄の忌や眼閉ぢても合歡の花

ふるさととは蛭にのこす大藁屋  
うつくしきひとのくるぶし星祭  
一杯のハワイ・コナー雲の峰  
七月や魚拓の大魚泳ぎ出す  
音消して蛇の水光青空に  
ぼうふらの叩けば沈み盆の来る  
魂棚や涼しき風の前を過ぐ



# 竹間集

同人作品



若狭晴

南うみを

いたどりを揺らし羽賀寺に猿ましらぬる  
くわんおんの指の先までみどりさす  
田を植ゑて動かぬ水となりにつり  
8の字にゆるく括りぬ茄子の苗  
背のびしてジャツクのゑんだう摘みにけり  
玉葱を吊るつかのまの若狭晴  
しゃくやくの深き淵より蟻もどる

四月馬鹿

島谷征良

花冷も灯ともしごろとなりにつり  
つとりつつ夜に入りけり花の雨  
小綬鶏のところ定めて鳴いてをり  
色褪せず都忘れも思ひ出も  
後輩が校長となる四月馬鹿  
海のもの香でつつみ木の芽和  
木漏日に遅れ薇揺れにつり

祭まへ

大竹淑子

桐咲いて賀茂の社は祭まへ  
萬緑若狭・桑心寺二句に開け放たるる坐禅堂  
頭陀袋饅頭笠吊る涼しさよ  
往時若狭・羽賀寺二句はや十八坊の若葉かな  
観音の持物もちに花よ安居寺  
ほとけにも横顔ありて麦の秋  
思ひ出の端に脱ぎおく夏帽子

ゆりの木の花

齊藤小夜

この年の熊谷草は母衣六十  
風が頬なでて過ぐるよ麦の秋  
ほととぎす恋うてひとりの旅に出む  
ひらかむとゆりの木の花力抜く  
野いばらや何処まで伸びて心足る  
山あぢさみひつそり咲いて花しまふ  
素気なく去る夏蝶に声をかけ

蜜豆

徳丸峻二

作業着干すくぐれば藪蚊顔に来て  
ほととぎす独身寮の小窓開く  
寝転ぶに程好き斜面麦の秋  
日盛りの女吸ひ込む煉瓦館  
吊革に父の日の腕並びをり  
風涼し足ぶら下げて庭の縁  
蜜豆を買ひ来て子等に囲まるる

ほととぎす

宮川みね子

大藪の上日のながれ夏兆す  
本郷の木造三階古巢かな  
新樹光折り紙に息吹き込みし  
法悦の通夜となりたる薔薇に雨  
夕空にさざ波立てり山法師  
あを空を刻ながれゆく巴巴杏  
ほととぎす裏返し干す楮釜

枇杷熟るる

浜 福恵

さくら実いかるがに木下より発つ群雀  
喪の家の石や草木や雨蛙  
巡礼のめざす近江や黄釣舟草  
鳩啼くや舟宿の枇杷熟るる頃  
森を出て水たばしるや竹煮草  
何鹿へ越す間道や時鳥  
枇杷の実の熟るるや沖を自衛艦

◆特別作品◆

## 舟屋日和

山路 紀子

卯の花や村の境にわあわあさん  
南風吹く肩寄せ合ひて舟屋かな  
麦秋の舟出払つてをりにけり  
まちまちに揺れ潮焼けの簾かな  
蟹歩く生け簀替りに舟屋口  
風涼し舟屋茶房は海の上  
とろとろと与謝の海あり聖五月  
箱庭めく伊根の入江や船遊び

海猫に撒くかつばえびせん夏立てり  
夏盛んしんそこ辛き地酒かな  
舟屋口芥の中に海月浮く  
白に茄子育てて舟屋暮しかな  
舟倉に舟吊り麦稈帽子吊り  
流れ藻に鷗の群るる薄暑かな  
大敷網にちりめん波や風薫る  
屋根にきて瑠璃鳴く舟屋裏通り  
竹秋や舟屋の壁に鯨鮎  
蛸壺に長き幹縄卯波立つ  
浦風に蛸干す舟屋日和かな  
峰雲や舟屋の庭は日本海

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

花石榴緋であるうちに落ちてこそ  
後宮の纏足の美女緋の牡丹  
書かざれば今日の終らず青葉木菟  
花紫荊明智の母の涙かな  
玉虫を卑弥呼の裔と思ふなり

天野みゆき

抱擁の秘仏の山や筍掘る  
夜は夜の匂ひとなりぬ白牡丹  
すれ違ひたる雲水の青嵐  
明易や母は机を持たざりし  
思ふことひとつになりぬ杜若

浅田光代

山法師の坂の行き来も佐倉かな  
でで虫や「医は天道に従へり」  
馬鈴薯の花に雨降る城下町

林いづみ

解体新書巻一筍流しかな  
木斛に兵士の文字や夏鶯

母の指長くなりけり五月来る  
母に聞く内緒話やクレマチス  
安永圭子

青芭蕉風と創作ダンスかな  
菖蒲湯に招くかたちの葉先かな  
娘の来れば妻から母へ雪の下

麦秋の駅に短かき旅信書く  
文机の何も置かざる涼しさよ  
落谷絹代

研ぎ澄ます蘭医の系図梅雨兆す  
青葉して一樹に兵の文字太る  
十字架の墓地に遍し新樹光

# 風土独語／神蔵器



芍薬の風脱ぐやうにひらきけり

林 いづみ

この句は写生であつて写生句ではない。竹の子句会前日の最後の吟行になつた佐倉順天堂記念館は閉門ぎりぎりに入館した。

一日を吟行して廻つた私達は、記念館の中庭に咲き誇る美しい芍薬に疲れを忘れ、誰もがほっと息をついていた。

夏の長い日もようやく西に傾き、梅雨時でもあつて、はやくも夕風が立ちはじめていた。だが、そこは順天堂の中庭、周囲は建物で囲まれている。外からはどこからも風が吹き込むことは考えられない。だのに何十本か何百本か、芍薬の花壇のあたりは揺れ、紅はかすかに、白はやや大胆に大輪の花がひらいている。風が芍薬に花を開かせるのか、芍薬が花をひらくために風を吹き起すのか。研ぎ澄まされた作者の鋭利な感覚、静かに豊かな呼吸が対象である芍薬の発する光をキャッチ、主観が純化されることによつて、芍薬の花の開く光を見事に昇華させた。

二菩薩は御背汗しておはすらむ

石井ケエ子

今年三月二十五日から六月八日まで、薬師寺の国宝日光・月

光菩薩立像、聖観音菩薩立像、吉祥天像など日本仏教彫刻の最高傑作が東京国立博物館で公開された。この句の二菩薩は勿論日光・月光菩薩立像である。

二菩薩は御身丈二メートル、本来あるべき中央の薬師如来、本尊側にそれぞれやや腰を捻り、絶妙のバランス、ごく自然に生き生きとしたお姿で立つておられる。背面はさらにすばらしく、むしろなまめかしくさえあるのではないか、僅かな薄くやわらかな衣など息を呑むばかりである。

ところで、この度の二菩薩の東京公開は、金堂の改修等、いろいろ事情はあつたようであるが、果してこれはよいことであつたのだろうか。

言うまでもなく、二菩薩はご本尊の両脇に侍して、教化、救済をお助けする。そのご本尊の薬師如来を置いて両脇の日光・月光菩薩の東京公開など全くの暴挙ではないか。まして二菩薩は光背を取りのぞかれていますのである。

それにしても見知らぬ土地に来て、多くの人々に、それが仮令尊崇の眼であつても、側面や背面をじろじろ見られることは、心ある作者も顔の紅らむ思いであつたらう。

仏には性別は無いとも言われているが、薬師如来は男性、二菩薩は女性のようなやさしさ、艶やかさがある。

平城遷都より千三百年、日光・月光菩薩はご本尊をにおいて、光背もつけず初めて寺を出て旅に発った。御背の汗は羞恥の汗か、それとも薬師如来に代つて、懸命に衆生の病氣を治し、安楽を得させようと祈願する慈愛の汗か。

(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

明史亡き丹後の海よ桐咲けり 東京 林いづみ

舟屋てふ表玄関夏燕

若狭路の植田明りに観世音

沢音の縁より上る夏座敷

芍薬の風脱ぐやうにひらきけり

それぞれの舟屋それぞれに夏つばめ

放哉の寺に放下の墓

葛饅頭若狭の水をいただきぬ

羽賀寺

夏草や長き御手に観世音

「曹源一滴水」なんぢやもんぢやかな

向かうから人揺れてくる芥子の花

祇王寺の閉門近き白牡丹

青竹を継ぎ足す傘や白牡丹

三門の西に生れし天道虫

東京

林いづみ

高槻

浅田 光代

東京

奥田 茶々

天井に挟まれさうな燕の子

翠黛の京都五山や桐の花

風涼し黄檗山の普茶料理

考へるために取るペン風五月

海に消ゆサンテクジュペリ紅き薔薇

天蚕や襷に納屋の薄明り

武家屋敷土塁に竜の髭の花

鎖国解く正睦邸に松の芯

挨拶に角つつかかれて蝸牛

羅に蘭学通りの別れかな

墓出でて電気明りを見てあたり

白雲にのる塔一つ山桜

余花残花山の眉目に溶け入りぬ

山法師廟に法衣をひろげ咲く

朴初花菩薩行者の手燭めく

相模原

奥山 絢子

相模原

鈴木みのもる

盛岡

石崎 浄